

俳句

おお なか しょう せい

大中祥生



周南市
(1923～1985)

青年時代から病気がちの祥生のいのちを支えたのは「俳句」であった。俳誌『草炎』を創刊。昭和三十年代は前衛俳句作家が台頭し、大中青塔子（祥生）もその一人であった。第二句集『領海』では、心の疼き、肉体の痛みを真正面から訴え続けた。現代人として問題意識に挑戦すること、俳句作家としての使命を自覚していたからであろう。一方、評論にも活躍し、「やわらかく、旨味があって読みやすい」（金子兜太）と高く評価された。晩年は俳句の作風にも伝統回帰への詩的精神風土の現出を見る。地方組織の設立、運営にも多彩な手腕を発揮した俳人であった。

（久行保徳）

【主な著作】

句集『群猿』（鳳鳴出版社、昭和47年）

句集『花候』（昭和出版、昭和52年）

句集『根白草』（昭和出版、昭和58年）